中世山城について

岡野　允

舞鶴地方には大小織り交ぜて戦国時代の山城趾なるものが六十余ケ所在る。所在は東西ほゞ相半ばする。

形態は大小広狭の差こそあれ図示の通り石墨はなく、山肌を削り二三段に落し腰曲輪を施し、屋根に両側より谷が切込んだところ等に空堀を設け、要所に土墨をかき上げた程度のもので、此の台上に土蔵に毛の生えたような建物や櫓を構え腰曲輪に逆茂木を結い乱杭を打った簡単なものであったと考えられる。高い山は居館は概ね山麓に営なんだ。

発生の必然性は次のように云われておる。

一、中世は兵農不分離で大名の直属家臣団も国人も地侍級の被官と同じく夫々郷村に居住したので有事の際拠るべき要害を必要とした。

二、右に加えて守護大名の一国を統轄し動員策戦上、主要街道や要津及び渡船場其の他急所は連環の如く堅固な諸城塞を配備した。

三、当地方は永年丹若両勢力争覇の渦中となった為両軍の拠点が犬牙錯綜した事。

しかし郷土史の大先輩故山本文顕氏も云われている通り、六十余城が常に併立していたのではなく、時と共に興亡もあり、一時の俄か城もあり大体戦国時代を通じて常時二三十ケ城位が活動しておったのではあるまいか。

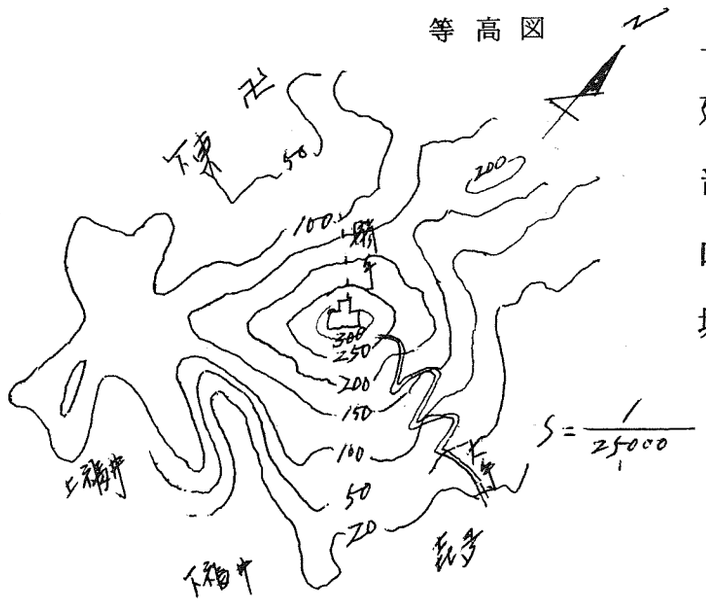
右で一寸触れたが故山本さんは昭和の初頭に東中方面の城跡を詳細に考証され時代の関連も捕えて実に名文で一編を残されておるのであるが、西地区は加佐郡誌等より余り拠るべきものがない。

丹波地方其の他には古城絵図もチョイチョイあるが当地方は略図も殆んど見かけないので近来思いつくまゝに柄にもなく機会を以て調べにかゝったが、雑木熊笹等密生して人を拒むものや名のみで所在不明のもの過半を過ぎ、残余も余暇なきまゝ未だ半数程は手つかずにある。

今茲に漸うやくかって杖を曳いたところを図引したものゝ洵に杜撰なるまゝ皆様の高覧に供するような代物ではないが、兎に角最初の試みとして叩き台にでもして戴ければ幸いである。

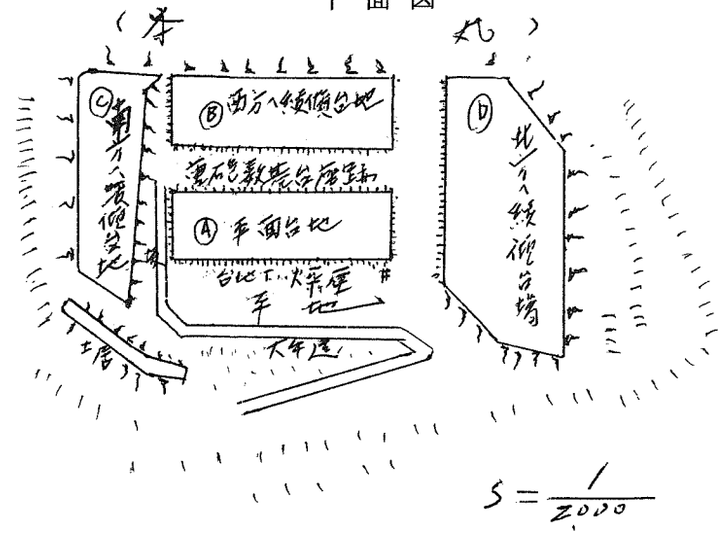
一、建部山城

等高図



凡例
1. ⌒⌒⌒は切岸又は崖を示す
2. ▲▲▲は岸を示す

平面図

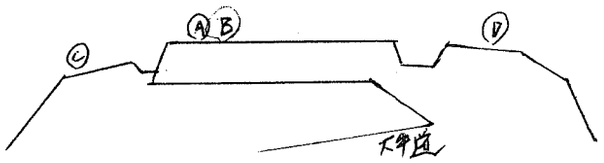


「注」明治三十年頃此の山頂に陸軍砲台築造され山容一変したと云う。

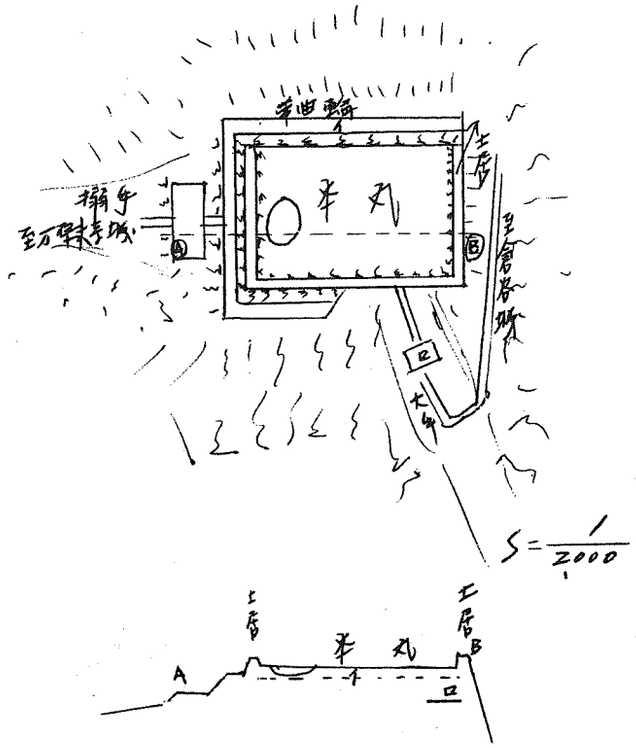
一色城時代は雌雄二峯に分れていたとも記されてあるも不詳。

今現状を見るに各台地共地肌は削り取ったような根跡なく往時の儘のものと考えられる。

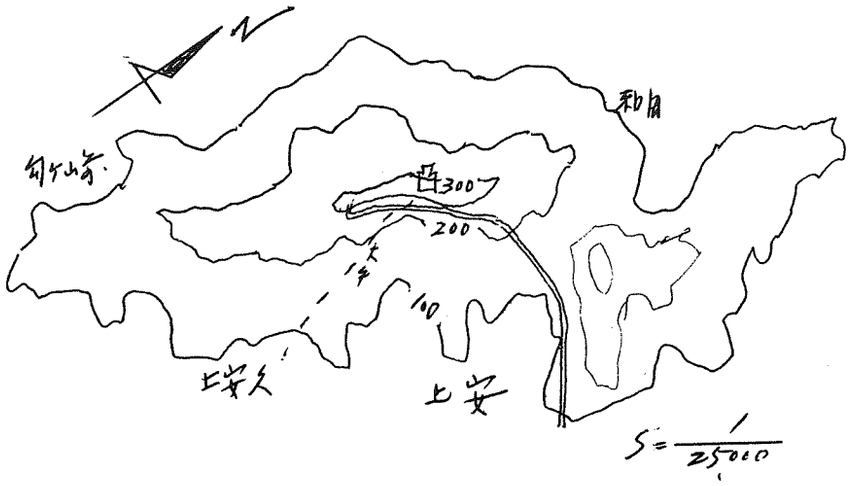
断面図

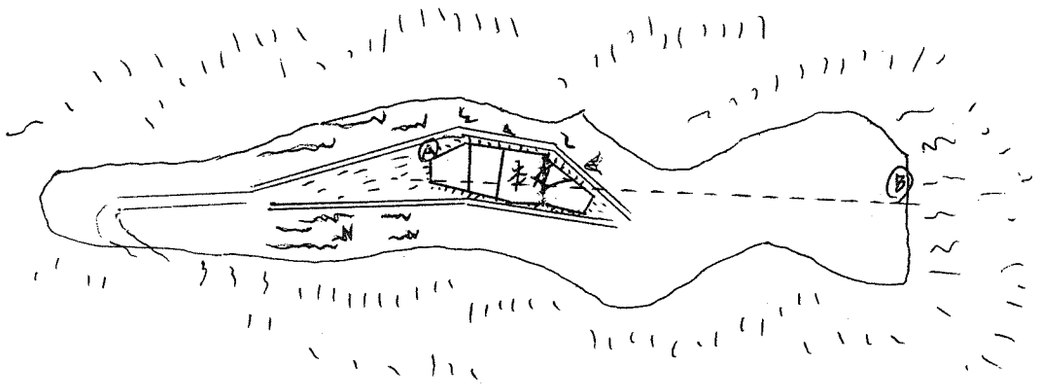


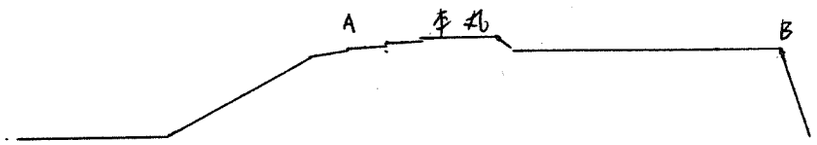
二、左武ヶ岳城



三、五老岳城

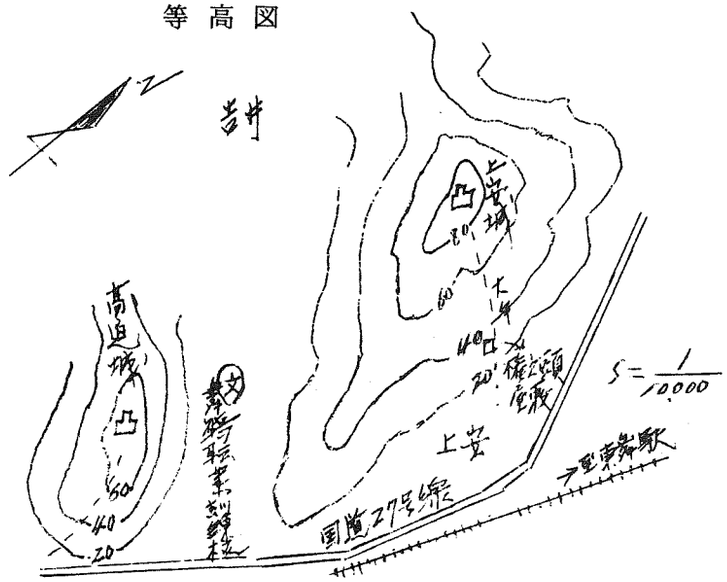




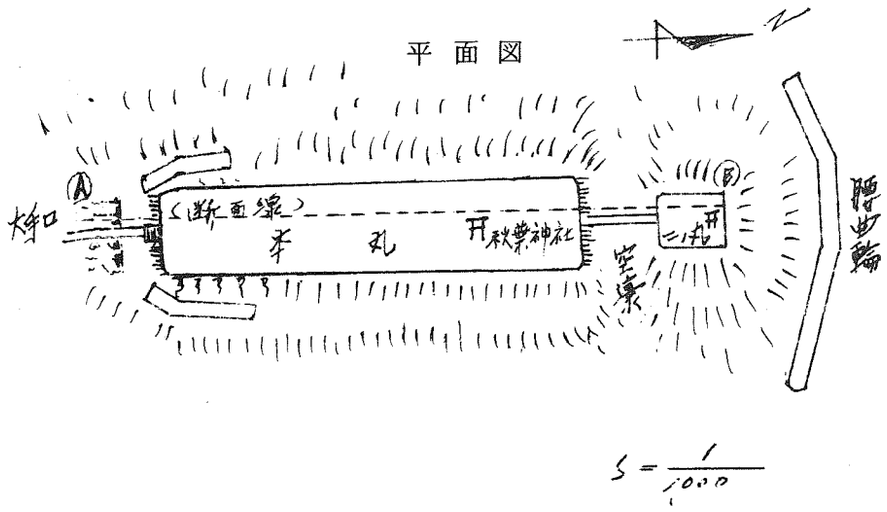


四、上安城

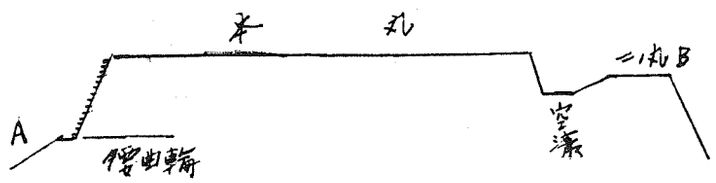
等高図



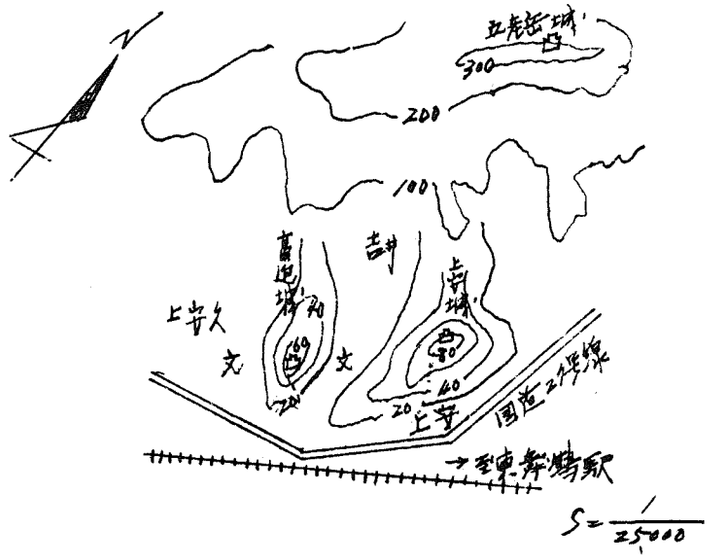
平面図

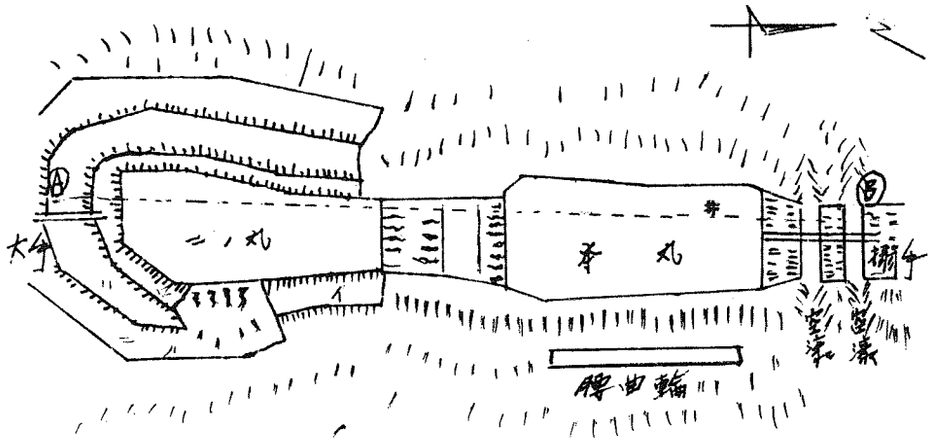


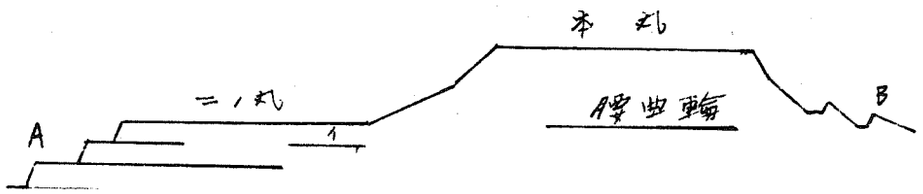
断面図



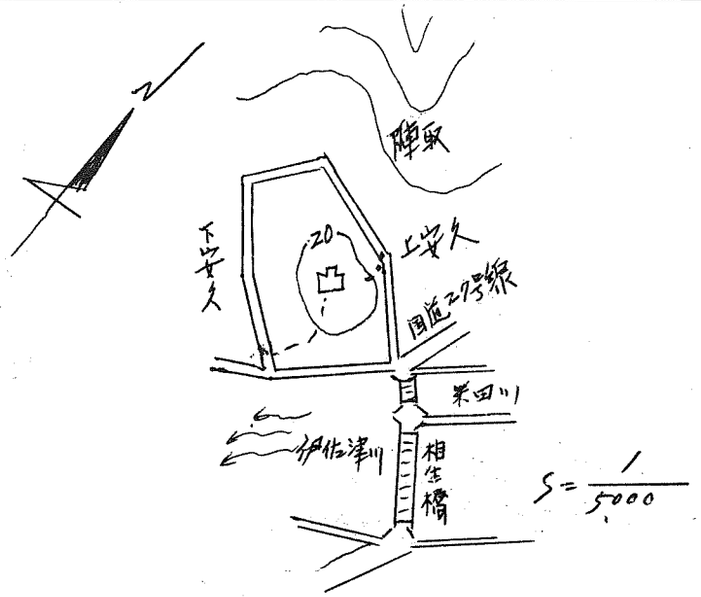
五、高迫城

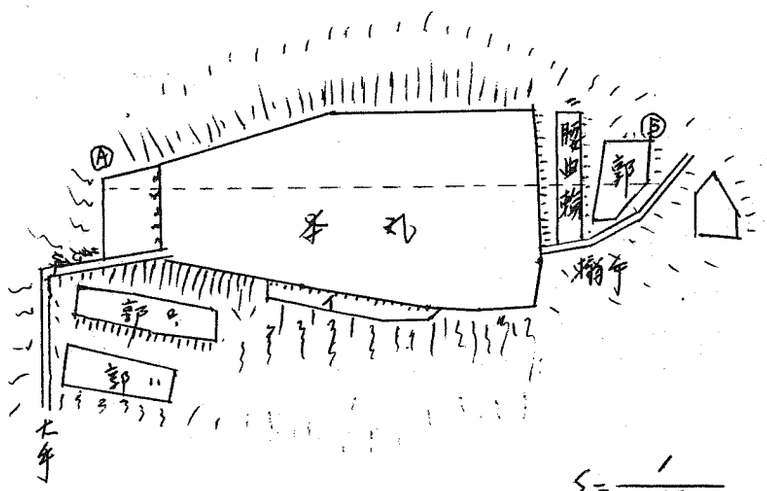


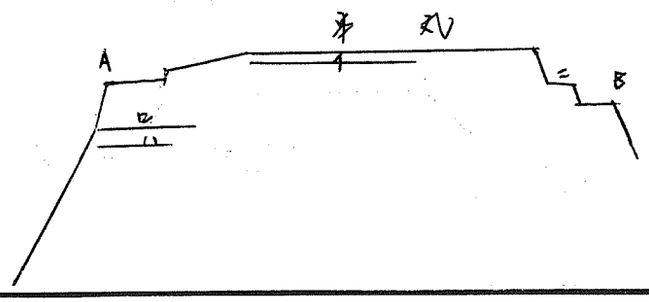




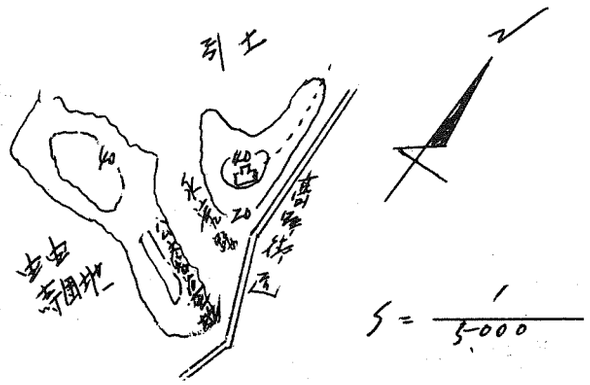
六、上安久城

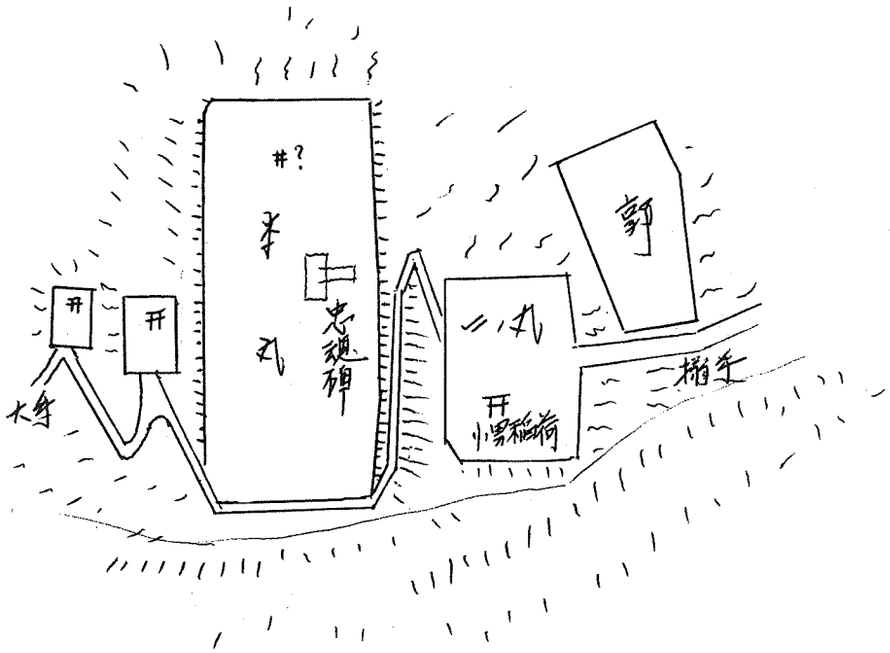

障取
下安久
上安久
国道27号線
米田川
伊佐津川
相生橋
S = 1/5000

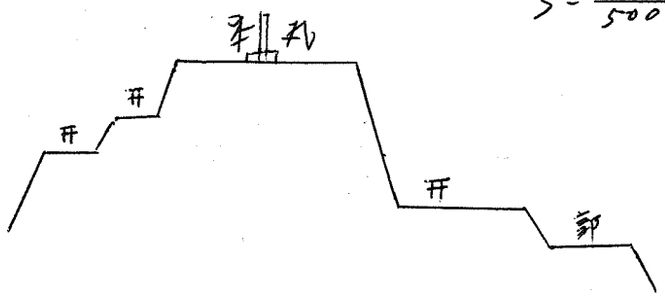

A
B
隧道
郭
郭
郭
搦手
大手
S = 1/1000


A
B

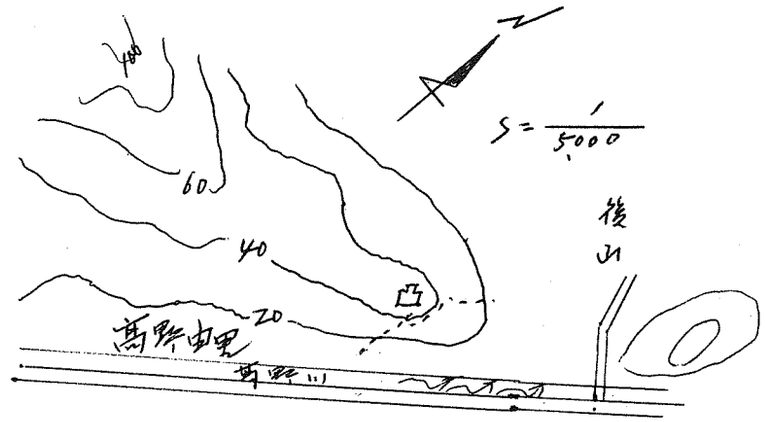
七、茶臼山城

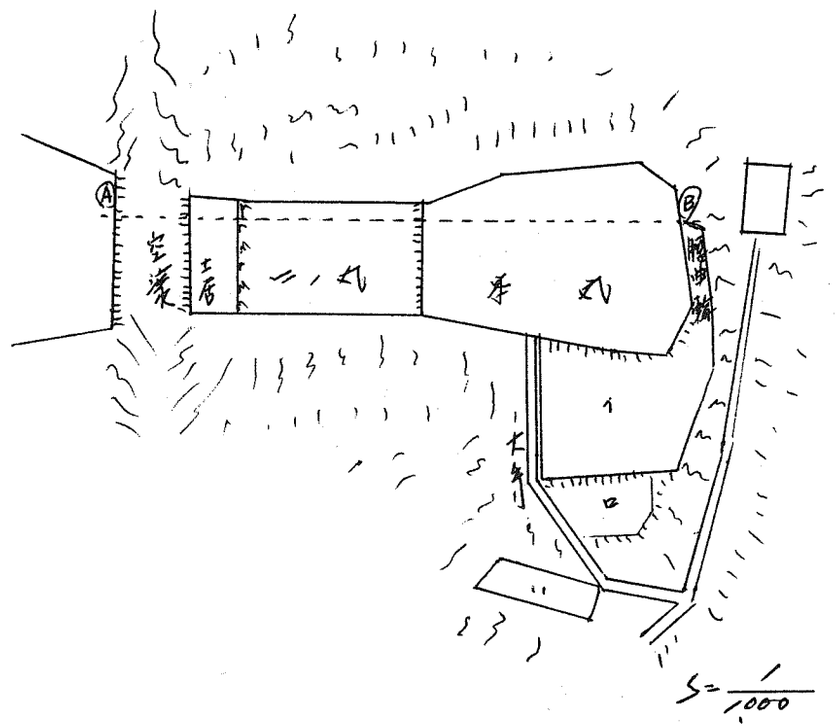

引土
安安寺国地
高等学校
S = 1/5000

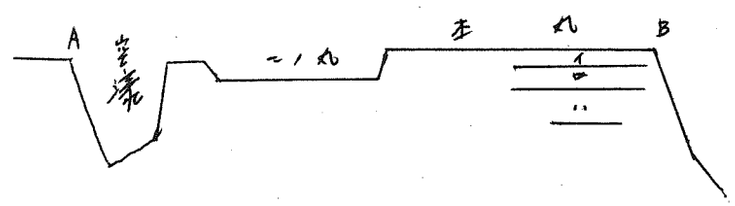

郭
忠魂碑
小男稲荷
搦手
大手
S = 1/500


郭

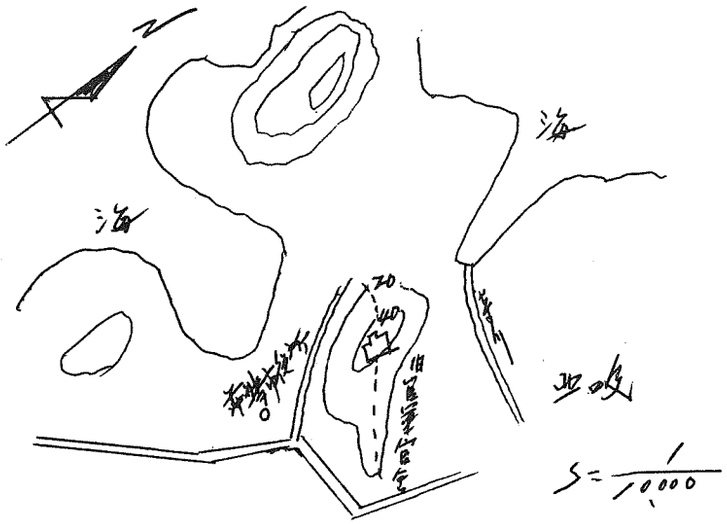
八、高野由里城

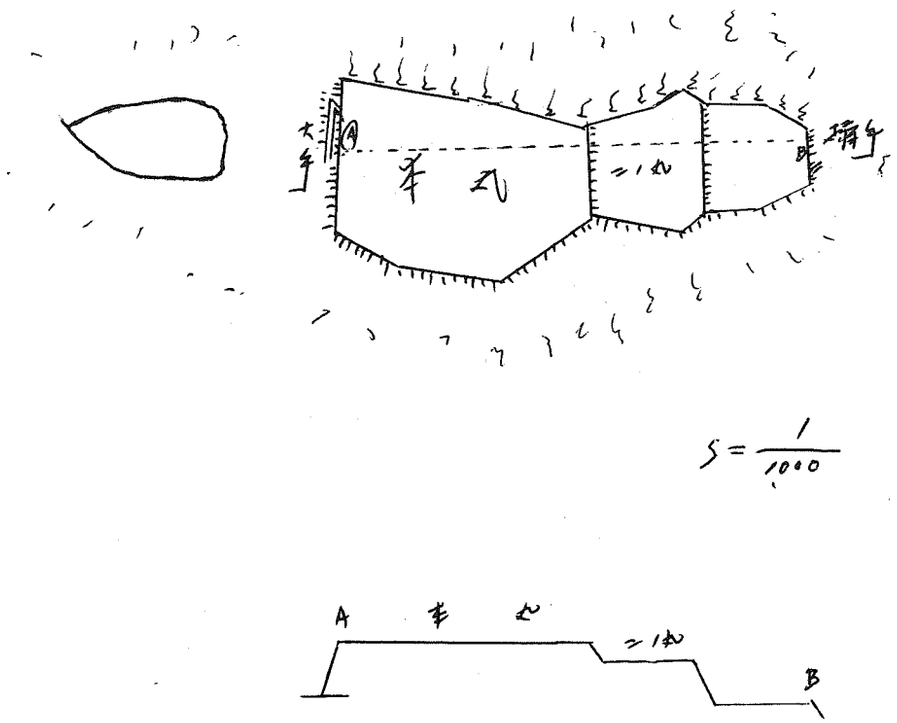

S = 1/5000
後川
高野由里
60
40
20


A
B
空濠
土居
二ノ丸
本丸
大手
S = 1/1000

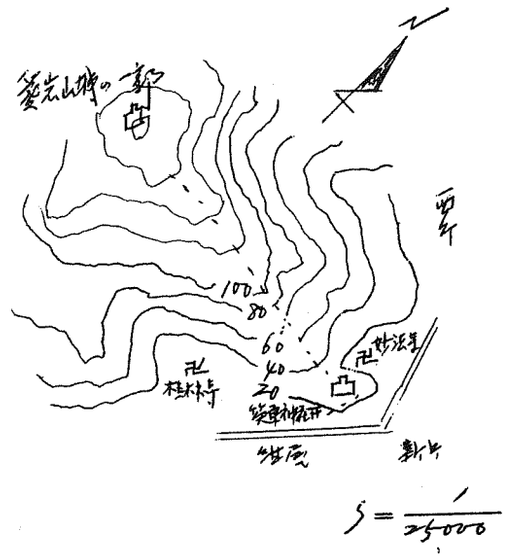

A
空濠
二ノ丸
本丸
B

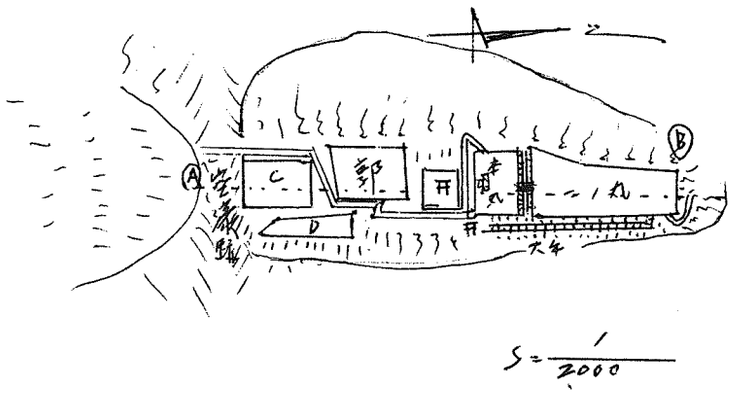
九、浜村城

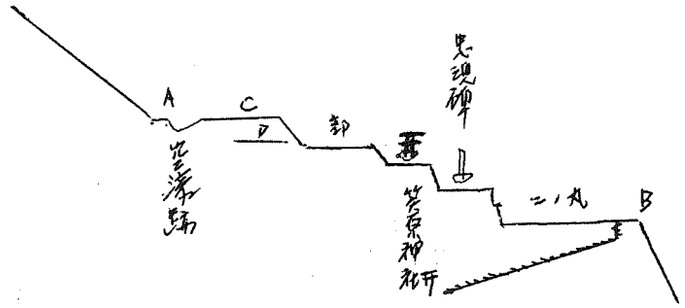

海
海
20
40
S = 1/10,000


A
B
大手
搦手
本丸
二ノ丸
S = 1/1000

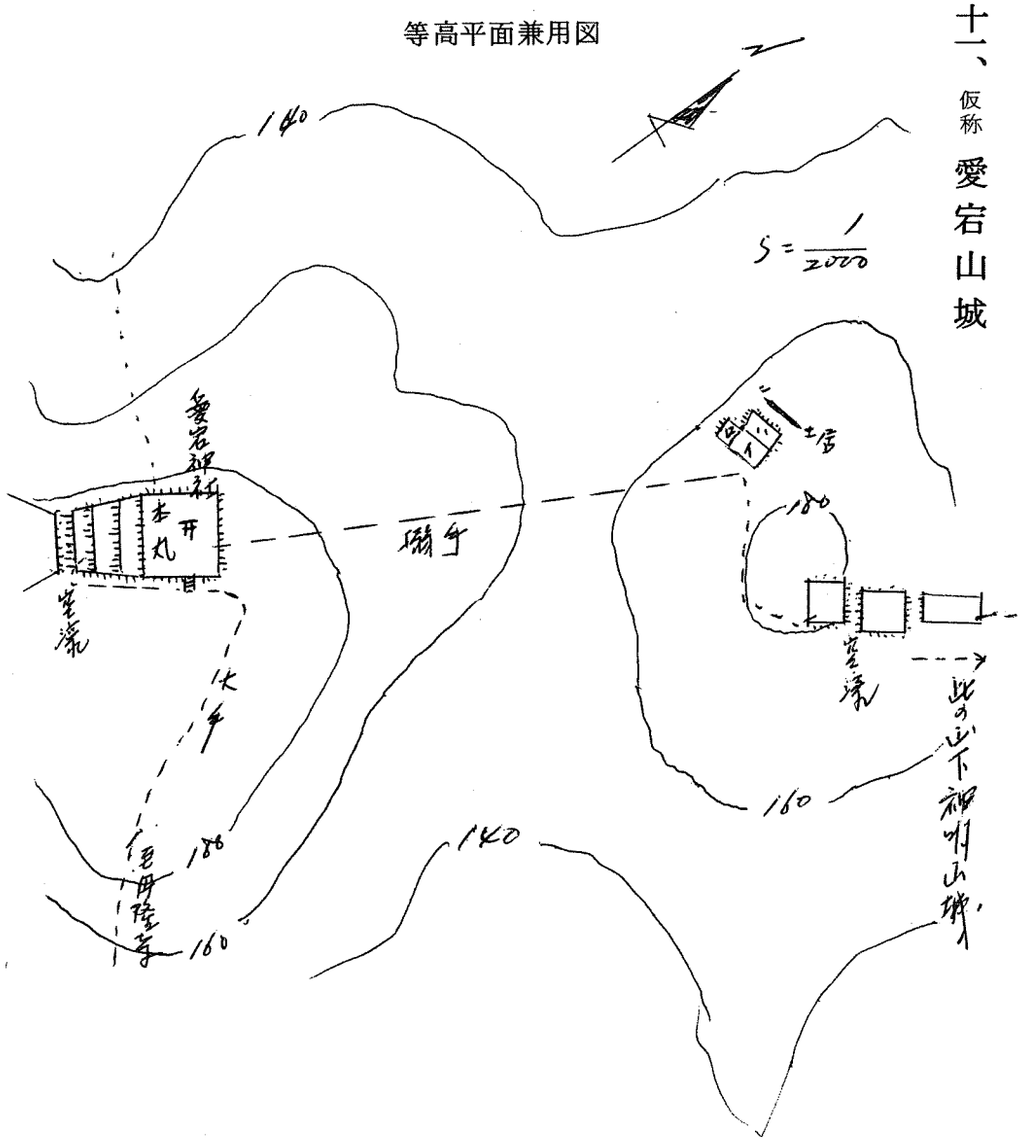
十、仮称 神明山城

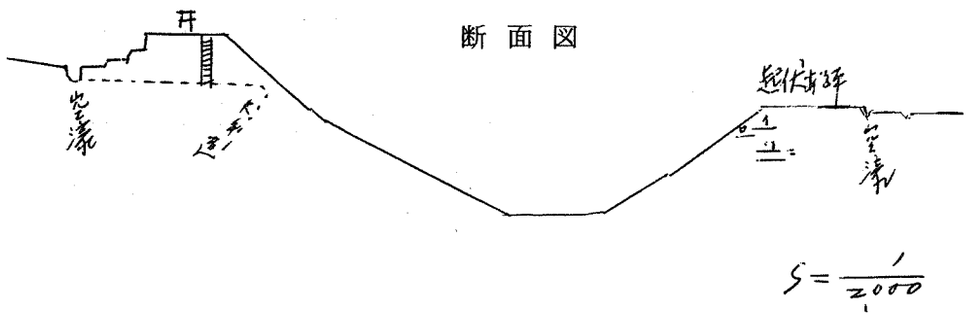






十一、仮称 愛宕山城





各城略譜

一、建部山城（又は八田城）字下東

当城草創に関しては丹後諸旧記は挙って、初代一色修理大夫範光、建武三年八月丹後守護職となり入国直ちに築城し、丹後八十五ケ城の総帥として威を振ったと記されておるが私は範光は足利尊氏の九州より東上に際し鎮西総探題として残留した一色範氏の二男であって、兄直氏と共に父を輔けて九州経営に身を挺して働き後延文年頃帰京し暫くして貞治二年若狭守護として同国に入部し身を終えたとの説を採っておるので旧記によらない事にする。

そこで最初に丹後一色氏として建部山城に拠ったのは誰かと云うと明徳の乱の大功により仝三年正月丹後守護となった範光の孫、一色修理大夫満範その人である。満範は将軍義満とは真に君臣水魚もただならぬ仲であったらしく将軍一代の間四五回も丹後に来遊しておる事は宮津玄妙庵由来記にもある通りである。

尚此の城は高山なるに拘わらず用水は実に豊富で大雨の節は池溢れて下東谷へ滝をなしたと云う。又大手口は字喜多で丹後諸所よりの物資の搬入並びに諸将の登場等の為かなりの船付場があった由。

二、左武ヶ岳城　字境谷

倉谷城又は大内山城とも書す。

実は左武ヶ岳は牙城にして本城は山下の倉谷城である。

南方尾根伝いに七八百米に支城万願寺城があった。馬場は北野天神社南方地名残る。

市内の山城で現在見聞したもので周囲に土塁を廻らしてあるのは此処丈である。

当城は大内庄及び池内谷を統轄し若狭街道を扼する要鎮であった。

城主次第

1　島津下総守忠氏

薩摩島津氏五代貞久の弟で同国出水城主であったが貞和元年（西一三四五）田辺地頭職となり入城したが後与謝郡伊根亀島に移る。

（島津国史、丹後旧事記）

2　沙弥信洞　貞治年間（自西一三六二至一三六九）在城

沙弥とは新入道の意で姓ではないので素姓は不詳であるが此の仁の系図也と云う弘安元年云々のものによると与謝郡の日置一族ではないかとも考えられる。

3　坂根修理亮満親　宝徳頃（西一四四九一四五二）在城

此の武将は毛並は余程良かったらしい。一説には将軍義政の庶子也とも云う。後孫は竹野郡島村に移る。

4　三上宗応信貞　元亀天正頃在城

丹後惣田数目録には

大内庄九七町二反三〇〇歩　三上江州

とあり。城大将日には一、五〇〇石と記す。

尚、倉谷城陣代は同じく田辺国城大将日には井田馬之丞　七〇〇石とある。

当城も天正の乱細川軍に攻囲され頑強に抵抗したので青谷よりの水源を断たれ火攻により攻滅されたと伝う。

5　慶長五年の小野木攻の時には、大内方面軍の小出大和、杉原伯耆等諸将の本陣となり握旗林立したと云う。

三、五老ヶ岳城　字上安

牧野河内守様高付覚にある上安三ヶ城の一である。

城主其の他一切不詳であるが此の山頂に立てば東西両舞鶴を一望に収める要地である。

按へば大永天文の昔丹若入乱れて舞鶴の地

に覇を競うた節いづれかの高級武将が一時之に拠ったか。

山上広闊にして亦大兵を容るゝに足る。大東亜戦には海軍の防空砲台設置された。

四、上安城　字上安小字城山

城主は地元では岡野権之頭と云うが例の城大将日は、岡野瑞見夫知斎七〇〇石と記す。

居館跡は山下の大手口にあって今も権之頭屋敷と称し境内天神祠にその霊を合祀する。

此の山城も御他分にもれず天正の頃滅され城主は戦死と伝う。

五、高迫城　字上安小字高迫

別名　新藤山城と称す。

城主は例の城大将日は

安久右京

安久左京　一、〇〇〇石とある。

大手口には天文十七年二月九日在銘の石地蔵尊の祠堂があったが由緒不詳。

大東亜戦中は簡易防空砲台設置された。

六、上安久城　字上安久小字城山

城主は安久右京進時親　四〇〇石

但し前項高迫城の安久氏とは別人ではないので右京とあるは右京進で左京は一族である。

之亦天正の乱に攻略され帰農した。今も細川軍陣せる所を小字陣取と称する。

七、茶臼山城　字引土

別名　引土城

城主は長沼小大夫　又は別名長江とも田辺とも称す。　田辺国大将日には

長岡小太郎　一、三〇〇石とある。

八、高野由里城　字高野由里小字引地

城主は今安相模守貞平　一、〇〇〇石

之も天正時落城後夫妻共にて土民の木屋に潜居していたのを訴人され為に丹波国に逃れるべく真倉下近迄行ったところ細川忠興軍に追撃され鉄砲でもって打果されたと云う。

（田辺寺社在旧記）

九、浜村城　字北吸

別名　長吉山城

当城は西方に館地のある水陸両方に臨む要害の山城である。

城主は桜井豊前守佐吉と云い、天正元年の居城であったことは西大浦の多弥寺に存する判物が立証する。

桜井氏は後豊臣秀吉に属し賤ヶ岳の戦においては、かの七本槍と倶にその名を謳われた三振の大刀の一人である。（故山本文顕氏記）

・但し田辺城大将日には三島外記重廉六〇〇石とある。

十、神明山城　字紺屋

茲は記録伝承一切ないが図示の通り人工防墨の跡歴然と存し立派な山城である。

十一、愛宕山城　字引土

前項と仝じく記録伝承の拠るべきものがない。しかし堡墨空堀等至るところに存し、二城を連結する大掛りな山塞であった事は間違いない。

細川幽斎は一色義道を建部山城に数ケ月攻囲し遂に落城せしめているが此処は建部とは指呼の間につき向い城としては格恰の場所でもあるので或は幽斎公当城に拠りて采配を振ったか。　次に之は右とは正に反対であるが、幽斎田辺城に籠城の節は大阪方主将小野木縫殿助は桂林寺に本陣を据え背後の山々には兵を上げ気勢を挙げたとか。

大尾として故山本文顕氏詠一首

矢たけびの声もあとなき松が根に
むかしを照らすゆみはりの月